

日本語の単語習得と漢字

村 田 美穂子

はじめに

ここで「漢字」と呼ぶものは、日本語を書き表す日本の文字としての漢字である。中国の文字のことではない。この漢字を留学生などの外国人は最初どのように受け止めるのか、そしてその後の学習の過程でどのような壁を乗り越えなければならないのか。日本の大学で初めて日本語を学ぶ留学生の様子などを紹介しながら、そういうことを少しまとめてみようと思う。

1. 漢字学習のはじめの一步

まず、日本人のばあいを考えてみる。留学生のばあいと比較するためである。

日本人の生活の中には日本の文字があふれているので、日本人は文字の読めない子どものうちから、書体やデザインがちがいもふくめて多くの漢字を目にしている。このような環境で、日本語が話せるようになってから、自分の話す母語を書き表すために、日本人は漢字の学習を始めるのである。文字にはひらがながあり、かたかながあり、そしてさらにたくさんの漢字があることにほとんど疑問がない。また、この段階ですでに、縦書きと横書きの両方があることに抵抗がなく、明朝体などのデザインされた活字と手書きの漢字のあいだにかなり形の差があることにもあまり抵抗がないのだろうと思う。明朝体は見た目には美しい漢字だが、手書きの手本ではないと気づいているように思える。

日本人が漢字を学習し始めるときには、すでにおよそこのような段階に達している。この状態を、仮に漢字学習の「はじめの一步」を踏み出した段階と呼んでみる。日本人は生活環境の中でいつのまにかこの一步を踏み出していることになる。

では、留学生など外国人のばあいはどうか。日本人が「はじめの一步」を踏み出す過程は彼らにとっても参考になるのだろうか。

漢字圏の出身者を除けば、「はじめの一步」の段階で日本人と彼らとのちがいは歴然としている。漢字の学習を始めるとき、彼らはすでにおとなだからである。そして、おとなになるまで漢字を見たことがなく、日本の文字全般について予備知識のないばあいも多い。さらに、おとなになるまで10の数字と30程度の文字でことたりている。そして、ほとんどのばあい日本語がうまく話せない。彼らの漢字学習には、日本人のばあいとは分けて考えなければならないいくつかの前提があるのである。ひとくちに漢字学習とまとめてかたづけることはできない。

ここですこし、留学生が漢字学習の「はじめの一步」を踏み出すまでの典型的なエピソードを述べておく。日本人として漢字とつきあってきた経験が、彼らの前ではほとんど役に立たないことがわかるだろう。笑い話めくものもあるが、大学の日本語教育の教室で実際によく見かけることばかりである。

文字の学習は、まずひらがなとかたかなから始まる。それぞれ46文字ある。ここで、まだ漢字の学習に入る前に、こんな質問が出ることがある。文字のセットはひらがなとかたかなとふたつあるようだが、私はひとつだけでいいと思う、どちらを選ぶのが得策だろうか。

すこし日本語が書けるようになって、横書きも縦書きも試してみたとする。たとえば「木」という漢字を横にふたつ並べると「林」になるが、これは横書きか縦書きかという問題には関係がない。しかし、「木」がふたつ横書き用に横に並んでいるという考え方がここに登場する。だから当然、縦書きのときは縦に並べなければならないと考える。その結果、「木」は縦に並べられて日本人には「木木」としか読めないものになる。「好」が「女

子)、「話」が「言舌」と縦に並べられると、解読はなかなかむずかしい。

原稿用紙のひとますに、何度注意しても「タイ」とかたかなをふたつ詰め込んだ学生は優秀なタイ人であった。

教室以外でも機会あるごとに漢字をおぼえようとする感心な留学生もいる。しかし、日常もっとも多く目にする明朝体を手本としてしまうので、「入」「令」「白」などはもう一度おぼえなおさなければならない。

いずれのばあいも当の本人は真剣そのものである。ひらがなかたかなどどちらかだけですませたいという申し出からは、表音文字がふた組あることを不可解で無駄と感じる心情がうかがえる。ひらがなもかたかなもどちらも必要で、さらにその上に漢字も必要なのだということは、最初のうちは理解のおよばないばあいがある。

「林」と書こうとして「木」を縦にふたつ並べてしまうのは、「木」にばかり気を取られているからである。「木」と「林」は別の字であること、「林」は分解できない一つの文字であることが理解しにくいのであろう。

「タイ」とひとますに詰め込むのは、これが1音節だからだろうか。「タ」「イ」と分解することに抵抗のあることが想像される。

明朝体そのまま写すことは、印刷物を手本にしているために本人にとっては注意されるのは不本意である。ローマ字でも小文字の a や g など、印刷物と筆記体とでは形がちがうのだが、そういうこととは結びつきにくい。

以上のエピソードは、漢字学習の「はじめの一步」を踏み出そうとしてうまくいかない留学生の足踏みの様子を物語っている。この足踏み以前の段階で、漢字というものがどうしても理解できない、文字そのものに意味があるということに全く対応できない、という気の毒な例もまれにある。日本人が気づかないようなさまざまな段階で、漢字というものに、また漢字1字の前に立ち止まる留学生は少なくないのである。

2. 漢字学習の目的

漢字学習は、漢字を見て、書いて、意味と読み方をおぼえることに時間がかかるが、単にたくさんおぼえること自体が目的なのではない。漢字学習は、実はそのまま日本語の単語を学習することでなくてはならないのである。「はじめの一步」を踏み出してのちの話である。

ひとつひとつの漢字が単に読めること、書けることは、漢字学習の目的から考えればあまり意味のないことである。漢字はいくつ覚えたら十分なのか、という質問も多いが、たとえば常用漢字表に載っている1945字が正確に書けるようになり、読み方がすべて暗唱できても、それで新聞が読めるようになるという保証は全くない。ひとつひとつの漢字は独立にではなく単語の部品としてはたらくものだからである。

また、たとえば「泳」という漢字を見て swim と答えるような学習法では日本語の「およぐ」という単語がどこかへ行ってしまい、これは中国語の学習かと錯覚してしまう。「泳」1字で表す単語は、中国語にはあるかもしれないが日本語にはないからである。漢字の意味がわかって、それが日本語の学習の一環でなければ、留学生にとっては意味がないことになる。

漢字はむずかしいから日本語が上手になってから勉強すると決めていて、かなだけで押し通そうとする留学生を見かけることもあるが、これも漢字と単語が連動していることに思いがおよんでいない結果である。大学の留学生は、専門用語や抽象的な意味の単語をたくさん使わなければならない。そのような単語を日本語でおぼえて書くためには漢字がどうしても必要なのである。留学生は子どもではない。おとなの使う単語には漢字、特に字音語がたくさん必要なのだ。

留学生は誰でも、日本語で作文を書くときに英和辞典のような2ヶ国語辞典をひくが、たとえば「それはみちだ」とひらがなで書かれると読んだ日本人は「道」と思いこみ、実際は「未知」なのだとか解読するまでにかなりの時間がかかる。書いた本人は辞書のとおり日本語で書いたと主張するだろうが、ひらがなでは通じにくい、誤解を招く字音語はいくらでもある。新聞の記事など、すべてひらがなで書かれたら日本人には解読の困難な代物となるだろう。

このように、漢字の問題は漢字だけにとどまっていない。漢字の学習は手間も時間もかかる割に記憶に残りにくく、日本語を学ぶ留学生を悩ませる唯一にして最大のものである。その点は同情の余地があるが、重要なのは彼らの流儀で手本のとおり、辞書のとおりを書くことではなく、日本人に解読できるように書くことなのである。

漢字学習の「はじめの一步」を踏み出した彼らが具体的にはどういう点にとまどい、苦心しているのか。以下ではその問題点を、ふたつの壁にたとえて考えてみる。

3. 漢字学習の「第一の壁」

たとえば「月」という漢字の読みをひらがなで書けというテストに、「つき」「がつ」「げつ」とみっつの答えを列挙する留学生がいる。「はじめの一步」を無事に踏み出してはりきっている時期に多い。この答えにはたしかに「つき」という正解がまざっているが、点は1点も与えられない。なぜなら、このテストは「月」が1字だけのときの読み方を問うているからである。それは「月」1字であらわす日本語の単語はなにか、という問いに等しい。この問いに答えをみっつも列挙する留学生は、「月」1字で「つき」と読み、「つき」という単語を表すということ、そして「月」1字のときには「がつ」「げつ」という読み方はしない、つまり「がつ」「げつ」は単語ではないということを理解していないのである。ここに「第一の壁」がある。

日本語の単語は、「月」1字で「つき」という単語を表しているように、漢字1字で書き表すことができるものがある。しかし、多くの単語は漢字をふたつみっつと組み合わせなければ書き表せない。漢字というものは、いくつか組み合わせさせて単語になったときにはじめて読み方が決まるものなのだ。「月」1字を「がつ」「げつ」と読んでも意味をなさず、日本人に通じないのはこのためである。「がつ」や「げつ」は単語の部品ではあっても単語ではない。

では「月」はいつ「がつ」と読み、いつ「げつ」と読むのか。ここで、漢字の学習は単語の学習なのだと思わなければならない。「月」1字でなく別の漢字と組み合わせたとき、この漢字は「いちがつ」となったり「こんげつ」となったりして日本人に通じる単語になるからである。「いちげつ」「こんがつ」では通じない、つまりこれらは単語ではないのだ。「月」という漢字を見たら「つき」「がつ」「げつ」と暗唱して終わり、というむなしさを思えば、「月=つき」「一月=いちがつ」「今月=こんげつ」と単語でおぼえる方がはるかに有効である。

このような問題を「第一の壁」とすると、これは訓読みと音読みの問題にほぼ対応しているといえる。漢字1字で単語を表すばあいは訓読み、複数の漢字が組み合わせられて単語を表すばあいは音読みと、だいたい決まっているからである。

ただし、名詞の「月」や「山」などのように簡単なものばかりではない。漢字1字で単語を表すばあいでも、たとえば動詞の「はなす」は「話す」と書いて表している。ひらがなの「す」を添えなければならない。この「す」は、この漢字を訓読みで動詞として読めという目印である。そして「はなす」という単語自体は「はなさない」とか「はなした」とか形を変える。このような単語は、紙の上では漢字「話」に「はな」というふりがながつけられ、さらに「す」とか「さない」とかのおくりがなが添えられる。では、「話」はふりがなに從って「はな」という漢字なのだろうか。これも留学生が誤解しやすい点であるが、「話」は「はな」という字ではない。「はな」という漢字、と言われて「話」を想像する日本人はいないはずである。

「話」は「はなす」という意味であり、「はなす」という字なのだ。同様に、「小」はふりがなは「ちい」とふるが、「ちいさい」という字なのである。おくりがなを除いた漢字の部分をどう読むかではなく、漢字の表す日本語の単語はなにかと考えるなければならない。

ふりがなは便利なものであるが、「話」を「はな」、「小」を「ちい」とするような誤解を生むことがある。これが人名のばあいには、一層の注意が必要となる。

たとえば女性の名の「美子」は「よしこ」と読むことが多い。だから「美子」という2字に「よし・こ」とふりがなをふるのは問題ないと思うが、「美」だけをとりだして「よし」とノートに書かれると少々問題である。現在、この字を人名以外で「よし」と読むことはないからだ。「太郎」や「三郎」も留学生には読みにくい名であるが、これらも1字をとりだして「太」は「た」である、「三」は「さぶ」とあるということになると問題であろう。人名や地名も単語の一種と考えた方がよい。

日本語のワープロが普及したまでは、単語と読み方の問題は、たとえばふりがなの「はな」とだけ入力しても目的の「話」という漢字には変換されないという事実と直結している。ワープロは日本語教育の早い段階から導入するのがよいと思うが、それは書く労力を減らすからではない。目的の漢字に変換するためには単語の一部

でなく全部が入力できなければならないということを、ワープロという機械が示してくれるからである。

およそ以上のようなことが「第一の壁」である。この壁には、漢字ではなく単語を、と書いてある。この壁を難なく越えていく留学生も多い。また、多少時間がかかっても、一度越えてしまえばこの壁は二度と留学生の前に立ちだかることはない。この壁さえ越えれば、留学生はワープロを「少し」便利に使えるようになる。

4. 漢字学習の「第二の壁」

なぜ「少し」なのか。それは、この先に少々やっかいな「第二の壁」が待っているからである。

留学生のほとんどが、ワープロを使うときローマ字入力を採用している。すでにキーボードの操作になじんでいる留学生には、ローマ字入力は一見合理的で簡単のように見えるが、「第二の壁」はまさにここにそびえている。

たとえば「東京」という地名である。ひらがなでは「とうきょう」である。ローマ字変換を採用している日本人ならこれを「TOUKYOU」と入力する。頭の中で「と・う・きょ・う」と分解しているからである。しかし一般的なローマ字表記は「TOKYO」である。留学生が知っている表記はおそらくこれだけだろう。そこでそのまま「TOKYO」と入力するとどうなるか。ワープロは「ときよ」としか答えてくれないだろう。

日本の首都の名を音だけで「トキョー」と知っていても、ワープロで漢字に変換するためには、実はひらがなで「と・う・きょ・う」と分解できなければならないのである。ローマ字で入力するといっても、それはまず正確なひらがな表記がわかった上で、そのひらがなを1字ずつローマ字に、これは頭の中で変換してから、さらに機械を使って漢字に変換するという作業なのである。「TOKYO」という表記からひらがな表記を類推するばあい、「とうきょう」に行き着くまでに「ときよ」や「とおきよ」を経由しなければならないこともあるだろう。また、「KYOTO」は「TOKYO」とよく似ているようなのに、前者は3モーラでひらがな4字、後者は4モーラでひらがな5字であること、「OSAKA」が「おさか」や「おうさか」でなく「おおさか」であることなど、「第二の壁」はなかなか手強い。

日本語の単語には、「しより」と「しょうり」、「きより」と「きょうり」、「しゅじん」と「しゅうじん」のようにひらがなの「う」の有無で区別される組み合わせが多い。「つか」と「つうか」、「すじ」と「すうじ」のような組み合わせもある。また、「しゅちょう」と「しゅっちょう」、「しょき」と「しょっき」、「かこ」と「かっこ」のような小さい「っ」の有無による区別、「しんぱい」と「しっぱい」のような「ん」のからむ区別も必要である。これら、ひらがな表記の「う」や「っ」や「ん」にかかわる問題は、音読みを組み合わせた字音語に圧倒的に多い。つまり、漢字でなければ意味のわかりにくい単語に集中した問題である。

日本語の単語にはこのような特徴があるため、日本人の耳はこれらの「う」「っ」「ん」の有無に敏感で、容易に聞き分けることができる。しかしほとんどの留学生は、これは出身国が漢字圏であっても、これらの有無の聞き分けを経験したことがない。「第二の壁」はまず、聞き分ける耳の問題なのだ。そのため、かなり流暢に日本語が話せるようになり、多くの専門用語も使えるようになってから、いよいよ本格的にこの「第二の壁」の厚さに気づくのである。何年日本にいても、「う」や「っ」があるかないか、というような確認はいつまでもついてもまわるようだ。

聞き分けることがむずかしい点は、言い分けることがむずかしい点でもある。たとえば「主張」には「っ」がないとわかっていても、それが正しく「しゅちょう」と聞こえるか、あるいはわずかの差で「しゅっちょう」と聞こえるかは日本人の耳で判定するしかない。このような問題は、日本人にとって英語のRとLの区別がむずかしいとされているのと同様、外国語の学習にはつきものの避けられないものである。こういう問題に対しては、文字を離れた問題として多少あきらめることは学習の効率をあげるために必要であろう。しかし、日本語の単語と漢字の事情を考えたばあい、あきらめてはいけないこともある。「第二の壁」と向き合うことをあきらめてはいけないのである。これまでに挙げたような、また「きよかしょう」と「きょうかしょ」のような似ている組み合わせの単語を正確に聞き分け、言い分けることはあきらめるとしても、ひらがなで正確に書くということをあきらめてはいけないのである。

実際のところ、ワープロが普及する以前には文字は手で書いていたので、漢字を書くことと「う」や「っ」の

有無のあいだに直接の問題はなかった。しかし、文字を機械で書く、ワープロを使って書くことになって事情が大きく変わったのである。ワープロは、漢字で表記するすべての単語に正確なふりがながふれることを厳しく要求するからである。漢字を正確に書く、あるいは書けるようになる労力をワープロは省いてくれるが、そのことによって「第二の壁」はむしろ高くなったともいえる。国語辞典で単語をひくためにひらがなの表記が必要なのと同様に、おとなや研究者に必要な多くの字音語を書き表すためには、実は漢字以前にひらがなが必要なのである。第二の壁には、ひらがなに返れ、と書いてあるのだ。

漢字学習のための「第一の壁」は、一度乗り越えてしまえば留学生は二度これに悩むことはない。しかし、次に待っている「第二の壁」には、漢字ごとに、また単語ごとに、向き合っていくことになるだろう。ワープロを使おうとするなら、この壁とのつきあいは長くなることを覚悟しなければならない。

村田 美穂子 (むらた みほこ)

1956年東京生まれ、学習院大学文学部卒業。専門は日本語学。千葉大学と山梨大学で非常勤講師として留学生のための日本語を担当。業績は『助辞「は」のすべて』（至文堂 1997年）など。